

—基礎科学から医学・医療を見る—

テキスト構成と重層のイメージ

崎村 耕二

日本医科大学基礎科学外国語教室

Textual Structure and the Image of Multi-Layeredness

Koji Sakimura

Department of Foreign Languages, Nippon Medical School

Abstract

This paper seeks to address the question how the textual structure of a paragraph can be better described as multilayered than as linear or two-dimensional. In order to explore the possibility of analyzing paragraph development in terms of textual layeredness, conventional prescriptive criteria for paragraph writing is examined. Then, a few examples of paragraphs are discussed in order to show that it is more truthful to describe the multi-faceted functions of a paragraph in a multilayered image of its structure. A model layout is given based on an excerpt from a popular handbook for writers.

(日本医科大学医学会雑誌 2015; 11: 110-114)

Key words: paragraph, textual structure, multilayeredness

1. はじめに

本稿では、テキスト構造のイメージ、特に重層のイメージについて考察する。前半では、一般的に行われている線的なイメージによる段落構成の諸側面を概観し、その限界を指摘する。後半ではテキスト構成の三次元的イメージ化、特に重層のイメージが書き手および読み手の視点にどのような変化をもたらすか、ライティング指導にどのような新しい方向性をもたらすかを示す。

2. テキスト構成の諸側面と段落構成の線的なイメージ

「テキスト構成」は、一般的な意味では、一定の内容をテキストに表すにあたってどのように組み立てる

か、という問題に関連する。ここには、配列、編成、系統の概念が深くかかわる。

配列には、テキスト全体における各部の空間的配置の問題がかかわるが、部分には各々の目的があってその目的に応じた配列が行われる。したがって、配列と目的は切り離して論じることができない。そして各部の相互の関係を視野に入れば、各部の目的、機能、関係（相互の関係および、上位下位のテキスト区分と各部の関係）が複合的に編成され系統化されるので、平面的なテキスト構成の理解だけでは、テキストの多様な形式的、意味的側面を十分把握して読解や作文に取り組みことはできない。

規範的な段落構成に関して、例えばH. Ramsey Fowlerは、段落には、統一性を持つ (unified)、一貫性を持つ (coherent)、展開される (developed)、の3つが必要だとし (56)、段落内の編成には、空間的

(spatial), 時系列的 (chronological), 一般から特殊へ (general-to-specific)/特殊から一般へ (specific-to-general) のパターンがあるとする (69-72)¹. 詳細 (details), 実例 (examples), 理由 (reasons) を示すことが必要だとし, これらを基本材料として, 例証 (supplying examples), 論拠の提供 (providing reasons), 定義付け (definition), 分割・分類 (division/classification), 比較・対照 (comparison and contrast), 類比 (analogy), 因果関係の分析 (cause-and-effect analysis), 過程の分析 (process analysis) によって段落が開示される (82-90). (多くの規範ライティング指導書を見るとほぼ同様にこのようなパターンが解説されており, 段落構造の基本を理解する助けとなる.)

以上のように要約される統一性の構築, 一貫性の保持, 一定の目的に応じた展開, という段落構成の基本原則は, テキスト生成のための知的活動と言語の理知的処理を必要とする. ところが, 段落テキストの構成を言い表す時, きわめて単純化された線的なイメージで把握され表現されることが多い. 例えば段落テキストにおける文の配列を考える時, 話題文 (topic sentence) の配置の問題が浮かび上がる.

話題文は単一の文であり, 段落の内容の核を成すのであるが, 段落の最初に置かれることが多いものの, 段落の中間に置かれることもあり, また結末に置かれることもある. 段落の冒頭, 中間, 末尾, という位置関係のとらえ方は, 線的なテキストの進行を前提としている. 段落というテキストのかたまり (block) を空間的にとらえて, 段落の上部, 中部, 下部と表すこともできる. この前提は基本的には文 (sentence) を句読点 (punctuation) で区切りながら, 空間的には, 行 (line) の線の上に連続して示す一般的な表記法に基づく.

書き手にとって, 先に何を述べ, 次に何を述べ, 最後に何を述べるかという語り (narrative) の順序の問題は, 「読む」という行為の時間的連続性および時間的前後関係の認知にも反映される. 時間の矢の進行に沿った位置表示は, 空間的表現と同様に線的なイメージに関与する. 学術論文でよく使われる「あとで述べるように」という言い回しは, この時間的な基盤のもとに用いられる.

しかしながら, 段落のテキスト構造は線的なイメージによる単純化, 様式化, 明確化のメリットはあるものの, 二次元的な基盤においてのみ表されるほど単純ではない. 一個の段落の内部だけを見ても, 話題文が段落の内容の核を成し, 他の部分とのかかわりの中で

各部が編成され, 段落全体を系統化する. また, 一個の段落は連続する次の段落とともに複合的なテキスト構造を形成する. 一編の論文全体を見た場合, 段落内の構造が複数の段落の連続の中にも埋め込まれていることに気づく. この場合は, 命題陳述 (thesis statement) が全体を覆い, テキスト全体の構成が理知的な論述で支えられている. ある段落が, 5 段後の内容と対照の関係を成していたり, 相互に関連を持っていたりする. このようなテキスト構成の豊富な機能やテキスト相互の関係性を観察していると, 線的なテキスト構成の表示イメージからはなれて, よりダイナミックなイメージの可能性を探る重要性に気づく.

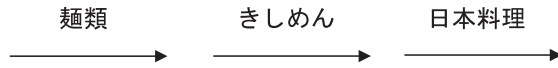
3. 段落の構成に見る文の配置と重層のイメージ

そこで取り上げたいのが, 重層のイメージである. 段落内の各部が分類され一定の層を成しているいなくにかかわらず, 重層構造という意味論的空間化を行うことができる. 意味論的な空間化は, 分類上の上下関係という空間的なイメージがテキスト構成における意味の重層化をもたらしている, という前提に基づく. 紙の上の (あるいはデジタル文書の) テキストは平面上に線的に表記された文字の連なりであるため, 空間的には1次元あるいは2次元で表示される. しかしテキストの内容が重層化されている場合, テキスト構成は3次元でとらえられる. 例えば「きしめん」について書かれた次の説明文における重層を考えてみよう (崎村 89-92)².

日本で一般的に食される麺類にはうどん, そば, ラーメンがあるが, これらが日本全国一般に食されるのに対して, きしめんは, ある地方で特に好んで食される麺類である. きしめんは愛知の人々が誇りをもつ名物である. うどんに似ているが, 平たくて幅が広がっている. 他の麺類と同じように味噌や醤油のつゆとともに出される. 日本料理には揚げ物, 煮物, 焼き物, 麺類をはじめとして様々な種類があるが, 日本の麺類は, その種類と言い, その料理法と言い, それだけで日本料理の豊かさを物語っている. きしめんは, 日本料理の奥深さを知るのに格好の食べ物である.

この短いテキストには内容の3つのかたまりがあり, 次のことが明らかである. <1>この段落のトピックは「きしめん」であるという点, <2>同時に, きしめんは, さまざまな日本料理の種類のなかで, 麺類に分類されるものとして話題にされているという点, <3>最後に, きしめんの具体的ないくつかの特徴 (日本の特定の地域, 特に愛知で好んで食される,

面が平たい, など)である。ところで, これらの要点をつかむ時, テキストに表示されている通りの線的なイメージでとらえたとしたら上記の3つの内容, 少なくとも3つの相互の関係を正確に認識することは容易ではなからう。



上記のような3つの要点の把握が可能なのは, 「日本料理」という話題と同一線上で「きしめん」という話題を把握するのではなく, テキスト構成の中に重層を読み込むからである。段落全体は次のような重層を成している。

上位レベル	日本料理	
中位レベル		麺類
下位レベル		きしめん

テキストは, 空間的には左から右へ(時間的には順次)進むのであるがテキストの重層構造は上位から下位へ降りていくのである。

それでは, このような意味論的な空間化はどのような認識的処理に基づいているのか。本稿は, 認知言語学の論考ではなく, 現象の観察を主とするテキスト論的な考察であり, 紙面も限られているので, 次の二点だけを考察するにとどめよう。

第一に, 段落の内容そのものが明確に重層を成して重層がテキストの中で明示されている場合とそうでない場合がある, という点。第二に, 明示されているいかにかわらず, テキストの重層構造は一般的に存在する。つまり, テキスト構成を論じる場合, 基本的には重層化が前提とされる, という点である。第一の点は, 多くの解説を要しない。上記の「きしめん」の段落を少し書き換えてみるだけで容易に説明できる。

世界各地を代表する料理には, フランス料理, イタリア料理, 中華料理, タイ料理など様々ある中で, 日本料理は日本の伝統的な料理として知られている。日本料理は, 揚げ物, 煮物, 焼き物, 麺類という区分に分類できる。このうち麺類の代表的なものは, うどんとそばである。この二つは日本各地で一般的に食される。しかし, ある特定の地方で人気のある麺類がある。きしめんはその一つである。きしめんは愛知で好んで食され, うどんに似ているが, 平たく幅が広がっているという点で独特である。

この書き換えでは, 重層構造は明白となる。他方, 同様の内容を表現していた先の段落では, いま述べた

重層が前提となっていないが, テキスト構成と対応していない。それでは, 先に提示した論点, つまり, 明示されているいかにかわらず, テキスト構成を論じる場合, 基本的には重層化が前提とされる, とはどのようなことか。すでに述べた話題文の位置の論議を再度取り上げて, テキスト構成における重層化の観点を考察しよう。話題文は実態として段落の冒頭に置かれることが多いという記述論的な(descriptive)観点, 他方冒頭に置くべきだと指導する規範論的な(prescriptive)観点, そして双方の可否の論議などについてはほかの論考に譲る(Braddock; Smith)³⁴。本稿ではあくまで, 段落構成を考える上でのテキスト論的な前提について考察したい。そのために, 線的なイメージから重層的な空間のイメージへの移行を示唆したい。

4. テキスト構成の重層的表示

話題文が「始め」か「半ば」か「終わり」かいずれかに配置されるか, という位置関係は, もし, テキスト構造はいつでも重層構造と重層化で成り立っているという認識があるならば, 本質的に重要な課題ではない。ここで話題文の位置と段落の構造を, 一般的によりどころにされる線的なイメージから重層のイメージに切り替えて考察する。

段落の実例の一つを取り上げる。次の英文では, 南米ケチュア語における時間表現が話題になっている。

In some of the Quechua [language] of Peru and Bolivia one speaks of the future as “behind oneself” and the past as “ahead.” Such interpretations of time have given rise to remarks by foreigners that the Quechuas have “a perverted philosophical instinct.” However, the Quechuas argue, “If you try to see the past and future with your mind’s eye, which can you see?” The obvious answer is that we can “see” the past and not the future, to which the Quechua replies, “Then, if you can see the past, it must be ahead of you; and the future, which you cannot see, is behind you.” Such an explanation does not mean that the Quechuas worked out a philosophical interpretation of the past and future before talking about it, but it does suggest that there may be equally valid but opposite ways of describing the same thing. (Eugene Nida, “How the Quechuas Think,” *Customs and Culture*.)

この一節は, Robert G. Banderによって *American*

第1層	段落の論点 (controlling idea).	A. 逆の表現を使って同じことを表すことの妥当性を示唆している.	
第2層	素材(下層)の要点.	B. 一般的な時間表現とは異なる特殊な時間表現を話題にしている.	
第3層	段落全体にわたる素材.	C. 具体例としてケチュア語話者の時間観念を取り扱っている.	
第4層	下層の(E)と(F)を上層へと導く帰納.	D. 一般とは逆の時間表現についてのケチュア語話者の論拠を具体的に会話文で示している.	
第5層	特定の話題 (上層で取り上げられて帰納されるべき陳述).	E. ケチュア語話者にとっては未来は前方ではなく、後方にあるものとして表現されることを述べている.	F. ケチュア語話者はゆがんだ時間観念を持つ、という通常の観点を示している.

English Rhetoric に引用された段落の実例である(11)⁵。話題文の提示と段落の展開という規範ののっとしており、統一性と一貫性を供えた段落として紹介されている。Banderはこの段落の話題文は最後の文であり、この文の中の“equally valid but opposite”という観念が、controlling ideaとして段落全体を総べている、とする(Bander 11)。

このように、段落の最後の部分で話題文が配置される場合に典型的なことは、当然ながら最後まで読まなければcontrolling ideaが把握できない、ということである。またしばしば見受けられることであるが話題文が正規に述べられない(unstated)場合がある。書き手はそれを暗示(imply)しなければならず、読者の側ではそれを推察しなければならない、と規範書は指示する(Carter 700)⁶。さらに、Fowlerが指摘するように、話題文を置くことで段落の効果が損なわれる事例もあり得る(63-4)。このような事実は、テキスト構成を線的イメージで表すことの難しさにつながっていく。テキスト上に明示されない要素を線上で表示あるいは暗示することはできないからである。

この線的イメージの限界を指摘する前提として、話題文が何を表すのかについての定義の相違を指摘することができる。Banderが用いている“controlling idea”とは別に、“central idea”(Fowler 57)あるいは“main idea”“main idea to be developed”(Carter 700, Trimmer 169)など、用語の広がりがある⁶⁷。また、話題文の働きは、段落の目的(purpose)を表すこと(Bander 8)、あるいは、“the general idea and the writer’s attitude toward it”を表すこと(Fowler 57)、さらには“(to) summarize the entire paragraph”(Millward 284)のように、論者の間に定義の幅がある¹⁸。

以上を考察すると、上記のように段落の最後に置かれた話題文の場合、“controlling”という概念では、前へ向かって段落テキストを総べている、というイメージが生じ、テキスト進行のイメージとは逆にな

る。また“central”という概念でも、「中心的な」というイメージと「段落の結末」というイメージがそぐわない。また“main idea to be developed”であればなおさら“develop”の意味に含まれる「これから展開する」という、前へ向かうイメージと食い違う。

このように考えると、段落のテキスト構成を、前述したような線的なイメージでとらえるのではなく、三次元的なイメージでとらえる可能性を探る重要性が見えてくる。先のケチュア語の例をもう一度見てみよう。重層のイメージにもとづいて段落内容を上記の表のように整理しよう。

詳しく解説するまでもなく、上記段落の実例は、この重層モデルでは第5層のEから始まっており、同じ層のFによる対比・対立概念の提示の作用を受けて上へあがり第4層の論述Dへと展開される。第3層のCはこの段落全体が取り扱う素材を示しており段落全体にいきわたる。第2層では、テキストでは明示されていないが、その素材を取り扱う要点(目的)を示している。第1層のAは段落全体の論点であるが、テキスト上は結末に配置されている。このことから明らかなことは、線的なイメージでは、段落各部の相互関係が前後の行き来でしか表現できないため、話題文の位置と段落内の系統が認識しづらいのに対して、重層のイメージでは、段落内の配置と系統化されたテキスト構造の相関が明確となる、という点である。

本稿では、伝統的な規範的ライティングの観点から始めて、通常、線的なイメージであらわされる段落構成、特に話題文の配置を考察し、最後に、重層のイメージによるテキスト構成と各部の系統化の重要性を示唆した。このようなアプローチは、今後、いくつかの重要な課題を生むと期待できる。複数の可能性を列挙して本論を結ぼう。第一に、重層という静的な構成の枠組みに対して「読む」という動的な知的行為を当てはめると、そこには当然、重層を降りる、昇る、という上下の力学が予想される。この観点は、テキストを前

から後へ読み進むという線的なイメージから書き手（そして読み手）を解き放ってくれる。そしてこの観点は、深くテキスト構造の中に降りていく、あるいは表層に戻ってくる、などのダイナミックな視点を、書く（そして読む）という行為の考察にもたらしだそう。第二に、重層的なテキスト構成の組み立てをアウトライニングに反映させれば、ライティングの準備段階に豊かな深みをもたらしてくれるであろう（Sakimura）⁹。第三に、段落を一件の家（a house）、各部を部屋（rooms）に見立て、読者を訪問者に見立てる比喩（Rabinowitz 14-15）を本稿の要点に当てはめれば、地階を含む2階建て、3階建ての建物のイメージでテキスト構成を考察することができ、テーマはさらに広がるであろう¹⁰。

文 献

1. Fowler HR: The Little Brown Handbook 2nd Ed. 1983; Little, Brown & Company, Boston.
2. 崎村耕二：論理的な英語が書ける本。2009; 大修館書店, 東京.
3. Braddock R: The Frequency and Placement of Topic Sentences in Expository Prose. *Research in the Teaching of English* 1974; 8: 287-302.
4. Smith CG: Braddock Revisited: The Frequency and Placement of Topic Sentences in Academic Writing. *The Reading Matrix* 2008; 8: 78-95.
5. Bander RG: *American English Rhetoric* (3rd Ed). 1983; CBS College Publishing, New York.
6. Carter B, Craig S: *The Rinehart Handbook for Writers*. 1988; Harcourt Brace, New York.
7. Trimmer JF: *Writing with a Purpose*. 2001; Houghton Mifflin, Boston.
8. Millward C: *Handbook for Writers*. 1983; CBS College Publishing, New York.
9. Sakimura K: A 3-Dimensional Mode of Outline Representation for Efficient Writing: from the Viewpoint of Textual Structure. *Research Reports of Department of Humanities 5* (Faculty of Humanities and Economics, Kochi University). 1997; pp 213-228.
10. Rabinowitz H, Suzanne V: *The Manual of Scientific Style*. 2009; Academic Press, Oxford.

(受付：2015年2月24日)

(受理：2015年3月24日)